

笠置寺調査概要

美術工芸研究室

昭和39年8月27日から29日までの3日間、美術工芸研究室は笠置寺の調査を行った。

笠置寺には、すでに、重文に指定されている貞慶筆紙本墨書の地藏講式一卷、弥勒講式一卷と、建久7年8月在銘の銅鐘がある。

美術工芸研究室は、これらの指定物件のほかに、笠置寺を語り、貞慶関係の遺品がまだほかに現存しているのではあるまいか、それらを調査するのが目的の一つであった。この調査を企画したのは、美術工芸研究室には当研究所創設以来の研究課題である南都諸大寺の研究がある。この研究課題の対象寺院の一つとして興福寺があるが、興福寺と密接な関係をもつ貞慶の寺院であり、また、南都とは密接な関係をもつ笠置寺をえらんだ。

藤末謙初（初）の頃、興福寺別当寛憲に従つて法相、律の二宗を学んだ貞慶は維摩会の講師となり、宮中にも召されて後鳥羽上皇、関白九条兼実の信敬を得たが、建久3年（1193）、山城の笠置寺に移り、16年後には海住山寺に移った。この間、唐招提寺で釈迦念仏会を始めたことはあまりにも仏教史上著名なことである。また、舍利の十徳をたゝえて釈迦を追慕するとともに、弥勒信仰を熱心に説き、大般若經を書写

し、笠置寺に壮麗な経台を作つてこれを安置したといわれ、なお、観音信仰をすゝめるなど、法相宗に新しい宗教的要素を加えようと努力したのも貞慶であつた。

笠置寺中興の祖はこの貞慶である。彼は熱心な弥勒信仰者で、この寺に移つてから笠置寺の復興に努め、頼朝の特別の寄進など得て、十三重塔、般若台等の諸伽藍をおこし、寺運は隆盛をきわめた。貞慶によつて漸く輪奐の美を整えた笠置寺も、「太平記」が物語るごとく元弘の兵火は、その景観を罹災煙滅に帰し、その痛手は長くつゞき、その後、少しの消長はみられるものの現在に及んでいる。

調査の結果は、絵画、彫刻、工芸分野で特に調査目的に適當する遺品は見当らなかつた。

いま、こゝに紹介する遺品は、貞慶と直接関係の有無は別として、工芸遺品として取扱われるとともに、笠置寺の弥勒信仰に関連するものとしてみられるものであろう。

和鏡（鳥螺草花文様）1面 藤原時代 青銅製

径 3寸3分 縁高 1分5厘

六器 1個 鎌倉時代 銅製

口径 2寸6分 底径 1寸6分5厘 高さ 1寸5厘

これらの遺品は笠置寺の本尊ともいふべき自然石に彫成された弥勒菩薩石像の周辺から出土したものである。尊像の左右の土が雨に洗われて荒れていたため、前住職がその土の表面をならすため手入れをしている際に掘り出した。現在、正月堂と呼ばれている礼堂のようなお堂の真向いの巨大な自然石に彫られているもので、今では仏像らしき姿は少しも見えない。元弘の兵火が、かつての尊像を消失してしまつたものであらう。

この弥勒像造頭の由来は、笠置寺縁起にみられるごとく、笠置に出現した天智天皇の皇子が、鹿を追つて危難に遭われた時、山神鬼魅に若し私の命をたすけていただければ、この巖に弥勒尊像を刻みたいと

念じられたら、そ

の危難をまぬがれた。そのため弥勒菩薩像を彫成したと伝えている。

第1図 和 鏡
縁起の真偽は別として、この弥勒石像はかなり早くから存在していたようで、この尊像を中心とした弥勒信仰も、すでに行われていたと考えられる。

貞慶入山の動機もこんなところにあるのではあるまいか。笠置寺に対する信仰が盛んになったのは末法思想が一般に滲透してからで殊に、貞慶がこの寺に移り弥勒石仏像に対する信仰に益々拍車をかけたことに帰因するだらう。そして笠置寺が弥勒仏の霊地と仰がれるようになった。

末法思想による末法到来の危機をもつともよく示すのは、各種の經典を書写し、それらを地下に埋め、弥勒菩薩出世のときまでこれらを伝えて衆生済度に役立たせるといふ埋経の流行であつた。この場合、書写した經典ばかりでなく、仏器仏具や鏡なども一緒に埋納したことはあまりにも明らかなことである。笠置寺のこの鏡は、埋経に関連するものと思われるが、何時頃の埋納かわからない。製作は藤原時代の作品で薄手のもので縁の高さも1分5厘。地中にあつたためいたまもかなりひどく、全面に錆がついているが、文様はよくみられる。藤原期特有の情趣ある文様で草花と二羽の鳥、一匹の蝶を出す。鈕は花形低座鈕である。

六器は一個しかみられないが、もちろん、埋納された時は同類のものがあつたらう。銅製で全面に錆が厚くついているが、錆がすりおと

された所は美しい銅の光沢がみられる。

底面に針書きがあり、「二岩」とよめるが、一岩とは何を意味するか判らない。しかし六器の底面などには、それを使用するお堂の名や、寺の名、または坊の名などがよく刻されていることから推測すると、この「二岩」とよめる名称は堂名か坊名ではあるまいか。小さい形のものであるが、張りもかなり強く造形からみてこの製作年代は鎌倉期と考えられる。

この六器も鏡と同じく埋経に関連すると考えられるが、鏡と同時期か、別の時期の埋納が不明である。

このほかに、出土されたいたみのひどい経筒、経筒を入れた壺などがあるが、何れもその製作年代に差があるようだ。したがって、それらの遺品が何時頃、如何なる形態で埋納されたかはわからない。しかし、これらの遺品は埋経思想に結びつけて考えられるものではあるまいか。

偶然の機会で見出されたこれらの出土品は断片的で笠置寺の弥勒信仰形態を説明するには、ほど遠いかもしれないが、よき資料たることには間違いない。

正規の組織をもった弥勒石仏周辺の発掘調査が可能ならば、笠置寺に一つの大きい資料を提供することになる。

(守田公夫)

絵画

笠置寺の仏画は32件(47点)を数へるが、寺史と直接に関連するものは、わずかに2件(4点)があげられるにとどまる。

製作年代についてみると、鎌倉時代1件(1点)、室町時代4(7)

笠置寺調査概要

江戸時代27(89)にわけられる。数的にその主体をなす江戸時代の作品は、数点の版彩色の作品をふくみ、真言宗の通見のものが多し。そのなかでは、紙本版彩色如来荒神画像一幅(竪68mm、横50mm)の画面左下に「宝山湛海印施」という文字が胡粉地を透してみえるのが、ちよつと注目される程度である。

ここでは、寺史と仏画史の両面で、若干の資料価値をもつ中世の作品を紹介することにする。

図像抄、巻第九 諸天上(口絵参照)

1巻

朱、緑青、群青、黄色顔料で淡彩を施した図像部では、肉身部などに淡い暈染をおこなっている処もみられ、色数は少いがその顔料は上質であつて、高雅な印象を与える。この鎌倉中期頃の風尚を伝へる1巻には、いろいろ注目すべき点もあるが、既に発表している(註1)で、それを参照されたい。

笠置寺絵縁起

3巻

紙本着色、卷子装

図 室町時代後期

第1巻

竪

横(全長)

一紙長(第二紙平均)

1003.38

紙数

絵・詞

巻首墨書「笠置寺縁起」

透漆塗桐箱入

第2巻

各7段

各7段

横(全長) 1197.5mm
一紙長(第二二紙平均) 49.1mm
紙数 31紙
絵・詞 各10段

見返し・紺紙

第3巻

横(全長) 1213.0mm
一紙長(第二二紙平均) 48.8mm
紙数 25紙
絵 9段
詞 8段

第4図

見返し・紺紙

杉箱入(第2巻共)

3巻の内容は、天文7年書写の

冊子本笠置寺縁起(笠置寺現蔵、大

日本仏教全書・寺誌編「所収」)によ

つている。

第1巻は創建より鎌倉時代の貞慶上人にいたる縁起を、第2・3巻は元弘の乱を語る。第2・3巻は縁起絵巻というより笠置山を舞台とする太平記の合戦絵巻という性格があらわである。このことは、寺蔵の明和5年(1768)に、笠置山衆徒より奉行にあてた裏打表具など修理の願状に「(上略) 絵縁起太平記、武巻宮人(下略)」とみえることとも一致している。ところで、いま絵縁起を天文本縁起と校合してみると、第1巻では事項の省略と、語句の省略、小異が指摘される。第3巻は一段一行の条すらあり詞書の敘述が極端に省略されているのかめにつく。ところが第2巻については、若干の錯簡がみられるが、

これは前述の明和5年修補の折の不手際かとも想像される。錯簡補正の試案はつぎようになる。

〔第2巻 錯簡の補正〕

試案	現本
詞 第一段 第五段前半	かてて一兩日の程は……
絵 一 四段後半	
詞 二 五段前半	同九月一日に笠置城へ高橋拔懸して……(註2)
絵 三 二 五	同九月一日六波羅の両 手 後 輔 屋三郎……
詞 四 三 六	同九月一日に両横断「治にて四分の手分して」(註3)
絵 四 四 七	同六日かきき寺にしの口へ武家の勢……
詞 五 八	「爰に備 中国 の作人すやまの藤三義高……」
絵 六 九	「かたしけなくも十 んのて」
詞 七 十	庭 前に諸口列座して御内をは下され
絵 八 一	「村上殿君の御身かわりにと立……」
詞 九 二	上 殿 君
絵 十 三	「爰村 殿 の御身替に自かいせらるゝ事……」
詞 十一 四	「元弘三年癸二月廿一日に東の侍從殿を……」
絵 十一 四段前半	

画風については「手みられる。」

第1巻を主として描いた画家と、(第3・5図)第2・3巻の中心となつた画家のそれ(第4・6図)とが区別できるのである。

前者の画風が第2・3巻中にもみられ、その逆に第1巻中に後者の画風もみられるから、画風の2種は制作年代の2期を示すものとは考えられない。前者は、人物より紋景を得意とし、山岳樹木の表現は伝統的描法を踏襲している。筆力は萎縮していて、表現は固くやや窮屈であり、画風は固い。

一方後者は、背景を大胆に省略し、色調も明るく、前者に比してひろびろとした空間に暢び暢びとした画境をつくつていて、絵画的にはたのしく、より近世的¹⁾ している。

しかしいづれにしても、画技は端正をきき、雅趣に乏しい。いわゆる奈良絵と称されるものの、それも初期に属する作風とみてよいと思う。

このほか中世仏画の作品としては絹本着色涅槃図(竪280cm、横85cm)一幅があげられる。

制作は室町時代の後期。色調は淡白で、謹細丁寧な技法がみられ、南部系の作風を示している。故老の伝によると、南部眉間寺より将来のものという。

また紙本着色貞慶上人画像(竪100.4cm、横53cm)一幅、絹本着色兩界曼荼羅図(竪50cm横55cm)二幅は、それぞれにちよつと注目すべき点もあるが、いづれも損傷がひどく、原容を想像することが難しい。

(平田 寛)

注

(1) 拙稿・笠置寺藏『図像抄』第九巻、大和文化研究・第9巻第10号。

(2) この条は天文本縁起によれば、むしろつぎの第3段と前後をかわるべきであるが、絵巻構成の点では、紙継を考慮すると、試案のように、ならざるをえない。

(3) この条は絵・詞ともに前後がはつきりとわかれるので、2段に分けて考えることもできる。

第 5 図

第 6 図